



花だより

鳥だより

ポロト案内舎 2018年 9月 81号



地震による停電が2日間続いた9月。幸い地震による被害はありませんでしたが、電気のありがたさを再確認しました。水は普段どおり使えたので、ランプの明かりで五右衛門風呂に入り、満天の星空を眺めて過ごしました。



ポロトのタンチョウ 家族で飛行



タンチョウ家族の優雅な飛翔を目にする機会が増えました。飛び立つ前に、親が「コッ、コッ」と声で合図します。ヒナは「ピー、ピー」と応えます。「飛ぶぞ、行くぞ」と、3羽の気持ちがそろったら、親を先頭に走りだし、一列に並んで舞い上がります。ヒナはまだ飛ぶ力が弱いので、長くは

飛べません。親が飛んでいるのに、着地することもあります。ヒナが飛ぶのをやめると、親もその近くに降りてきます。

例年なら、ポロト沼のなわばりを離れ、近くの牧草地に遠征する頃ですが、まだその様子は見られません。越冬地に向けての長い旅に備え、ヒナにはさらなる飛行訓練が必要です。越冬地は鶴居村や阿寒町にあります。ポロトからは直線で100キロくらい離れています。親の飛翔力でしたら、半日くらいで到着する距離です。しかし、ヒナには遠すぎます。短い距離を少しずつ飛びながら、休み休み移動します。10月になると、牧草地にヒナ連れのタンチョウ家族を見かける機会が増えます。どの家族も越冬地に向けて移動しているのです。



ラッコの授乳



霧多布岬には、一年を通してラッコが生息しています。特に夏の時期はよく見かけます。岬に行けば、ほぼ毎回出会えるくらいの確率です。今までで一度に見た数の最大は3頭です。

22日にも3頭が岸に近いところで休んでいました。よく見ると、左側のラッコの後ろ足の付け根に、もう1頭のラッコが顔をくっつけています。これはメスが子どもに乳を与えているところです。この2頭は親子です。ラッコの乳首は、後ろ足の付け根に2つあります。授乳はほとんど海に浮かんで行われます。

哺乳類は一度に産む子供の数に合わせ、乳首の数が決まっています。ラッコの場合、ほとんど1頭だけ産みます。たまに双子の場合もあるそうです。2つの乳首で十分足りそうですね。ヒトやサルも2つですが、胸に乳首があり、母親が子どもを抱きかかえて授乳できます。ラッコも胸に乳首があった方が、都合が良いように思えます。しかし、硬い貝やウニを、胸に置いた石に叩きつけて割って食べる習性があるので、後ろ足にあった方が便利なのでしょう。

子どもは自分で固形物を食べれるようになって、かなり長い期間乳を飲んでいますが、この子どもは、ほとんどメスと同じ大きさですが、お乳を飲んでいますが。メス親は子どもの分まで貝やウニ、カニなどの食べ物を捕まえて与えます。寒い海に暮らすラッコは、体に脂肪がほとんどないので、大量の食糧が必要です。1日に体重の20%くらいを食べないと、生きていけないそうです。そし

て、保温と防水のために、体毛を良い状態に保つ毛づくろいが欠かせません。母親は子どもの毛づくろいも行います。子どもがいるメスは、とても体力がいます。

ところで、母子のそばで、気持ち良さ気に寝ている大きなラッコは、誰なのでしょう？大きさをあわせてオスのようです。お父さん？ラッコの婚姻関係は複婚です。オスもメスも複数の相手と交尾します。ですから、隣に寝ているからと言って、子どものお父さんとは限りません。お父さんでも、よそのおじさんでも、オスは子育てをしません。メスだけが子どもの世話をします。ラッコの世界に「イクメン」という言葉はないのです。



まだまだ残っています



すっかり存在感がなくなった夏鳥たち。子育てが終わると、羽が抜け変わる換羽に突入します。翼の羽も生え代わるこの時期は、ひっそりと目立たぬように暮らしています。うるさいくらいに囀っていた小鳥たちが、草や木々の間で静かにしています。もういなくなったのか、と思うくらいです。

しかし、たまには姿を見せてくれます。ちょっと赤みが薄くなったベ

ニマシコが、サウナ小屋の横で、ヨモギの種を食べていました。両足でしっかり茎につかまり、もぐもぐと、くちばしを動かしながら、しごくように種を食べていました。



ワシだけでなく・・・



例年、9月のこの時期には、ポロト沼にオジロワシが集まります。弱って岸に打ちあがったサケを狙ってやって来るのです。多い日には、10羽以上のワシが、あちらこちらでサケの死体を食べています。

ところが今年は、ワシだけではなくヒグマもやって来ました。サケ捕獲場続くゲート前に、クマ出没注意の看板が設置されています。クマを目撃した近所の人のお話だと、若い個体だったそうです。ヒグマ

マは一度食べ物にありついたら、その場所に執着する習性があります。このクマも2週間以上ポロ

ト沼周辺をウロウロしているようです。ポロト沼のほとりに暮らして15年になりますが、ここにクマ注意の看板が立ったのは初めてです。今年がいつもの年と違うのは、幌戸川河口部のサケ釣りが禁止になったこと。例年多くの釣り人が河口や海岸に集まります。今年は人の気配がないので、クマが近寄りやすくなったのかもしれませんが。

朝、昼、夕と、1日に何度も沼の周囲に目を凝らしているのですが、いまだ目撃に至っていません。「見た、見た」という人から、いろいろな話は聞くだけです。いちばん近くの住人がまだ見れていません。見たいけれど、出会いたくはない存在です。



ついに最後の花になりました



今年も霧多布岬をコハマギクが彩る時期になりました。これが咲くと、花の季節の終了です。まるで「蛍の光」のような花です。もう岬に、この花以外はありません。湿原には、種ができ、枯れ始めたサワギキョウやトリカブト、それにエゾリンドウが見られます。しかし、どれも勢いがありません。元気がいいのはススキやヨシの穂です。特にススキは、夕日に照らされ黄金色に輝いています。



案内舎の車が変わりました



マツダ CX8 に車が変わりました。先代のエスティマ・ハイブリットは、12年間故障もなく、24万キロを走ってくれました。多くのお客さんを乗せて、たくさんの鳥との出会いに貢献しました。快適に安全に、四季の風景の中を走ってくれました。思い出の多い車でしたが、エンジン音が大きくな

ってきたので、故障する前に引退させました。

これからは新しい車が、前以上にワクワクする自然との出会いに、連れて行ってくれることでしょう。安全第一に運転していきます。最近の車は、安全装備が充実していますから、運転者の老化をカバーしてくれるものと期待しています。

車と運転者、次に引退するのはどちらでしょうか？